

〜死がふたりを別つまで〜

# 呪婚



ご注意ください。

---

---

この作品はフィクションです。  
実在の人物、団体、事件とは一切関係ありません。

---

テレビからニュース番組が流れている。

ニュースの女性アナウンサーは事務的に淡々と原稿を読み上げている。

「本日未明都内のマンションの1室から首を絞められた女性の遺体が発見されました、同居している男性よる犯行だと思われることから行方がわからなくなっている男性を捜しています」

「次のニュースです・・・」

テレビでも憂鬱なニュースばかりが流れている、まるで今の私の気分のような。

本来結婚を3ヶ月後にひかえた私は女として人生の中で一番輝いているべきはずだった。

だが実際には私の心は言いようの無い不安に押しつぶされそうで仕方ない。

俗に言うマリッジブルーというヤツだ・・・相手は2年前から付き合っている脳外科医。

私にはとても優しくしてくれるし私の望む事ならなんでもしてくれるそんな彼。

ルックスも、収入も文句などない、普段はとても楽しく過ごしているのだが

なぜなのか結婚を考え始めてから嫌な胸騒ぎして仕方なかった。

そんな日々の中で、私はまた別な男性と知り合った。

仕事を通して知り合ったその男性は企業家だった、脳外科の彼と年もほぼ同じなのにまるで違って見えた。

私に尽くしてくれる脳外科の婚約者とは正反対に私を自分に合わさせるようなそんな力強さと魅力があった。

あの言いようの無い不安からか私は知らない間にそんな企業家の彼に引かれていった。

婚約者の彼には悪いと思う、あと3ヶ月もすれば私は彼の元に嫁ぐというのに……。

しかしそう考えれば考えるほど不安は膨れ上がり企業家の彼との距離をちじめる結果になった。

企業家の彼のそばに居る時だけは私はその漠然とした不安から開放された。

しかしそんな企業家の彼との関係も1ヶ月も続くと婚約者も気づかないはずは無かった。

中々会おうともしない私の態度を不信に思ったのか毎日式の決め事などにかこつけて会おうと迫るようになった。

その頃には私の中では婚約者の彼はもう顔も見たくない相手へと変わってしまっていた。

毎日なんといって脳外科の彼から逃げ出そうか……そんなことばかり考えていた。

そしてついに痺れを切らした婚約者が私達が会っている現場に押しかけて来た。最初は怒鳴りつけるのかと思ったが婚約者の顔はすでに涙でグシャグシャで苦しそうに嗚咽を上げて私達を見つめてこう言った。

「遊びなんだろう？俺達は2ヵ月後には結婚するんだ、今更別れるなんて言わないよな？そうだろう？なあ？」

それは私を戒める為の言葉などではなく母親にすぎり付く子供の様な、懇願を思わせるような言葉だった。

それを聞いた瞬間私の中でこの男との関係は終わりを告げ興味も敵意も何も湧かずただ侮蔑だけが残った。

「この状況を見てまだそんな事言ってるの？あなたの顔見るのも嫌になったのよ、もう放っておいてよ！」

そう一喝すると男はその場で跪きまるで子供がダダをこねる様に泣き叫んだ。

「嘘だ！君がそんなことを言うはずがない、君を幸せに出来るのは僕だけだ！！」

「もう出てってよ！顔も見たくないって言ってるでしょ！！警察呼ぶわよ、早く出て行って！！」

そういうと私は泣き崩れる婚約者を玄関の外へと追い出した、内心動揺していたけれど、どこかホッとしている自分に気がついた。

その日から2ヵ月間、医師の彼からは携帯に何度も何度もしつこく連絡が入っていたがすべて無視した。

ストーカーになるのではないかと心配する企業家の彼に私はダイジョブだと言いつつも不安がって見せた。

そして一番の解決策として私は企業家の彼に結婚する事を持ちかけ、結婚すればあの医師の彼も諦めるだろうと説得した・・・。

企業家の彼もそれならと納得し本来あの婚約者と結婚する予定だった同じ日に同じ教会で式を挙げた。

これは元婚約者の彼に見せつける為だ、

ワザと彼の友人に結婚する事を話し彼の耳にこの結婚話が伝わるように仕向けた。

あの元婚約者に最後の通告を渡すつもりだった、これでもう後腐れなく私は幸せになれるそう思ったからだ。

結婚式当日、彼が姿を現すのではないかと思ったがそんなことも無く

それまでのモヤモヤとした不安が嘘のように晴れていた。

あれほど毎日かかってきていた彼からの携帯への着信もその日以後ピタリと止んだ。

私は新しい伴侶を得て、これからの輝かしい人生に思いを馳せていた・・・。

結婚から1年、順風満帆に進んでいた夫婦生活に亀裂が生じたのは夫の事故が原因だった。

酒に酔って車を運転しバイクと接触する事故を起こしたのだ。

幸いバイクの運転手は大きな怪我などは無かったものの夫は体を強打し

全治3ヶ月の傷を負いさらに足に後遺症が残った。

その事故の原因が飲酒運転だったのせいもあり夫は会社での地位を追われ

経営していた会社は他人の手に渡った。

それ以来夫は仕事もせずに家に引きこもるようになり酒に溺れアルコール中毒になっていった。

酒を飲むのを止めさせようとする暴れ私にも暴力を振るうようになり口を開けば

「お前と結婚したせいでこうなった」と言い出す始末。

ますますエスカレートする暴力と生活を支える為に始めたやりたくも無いパートの仕事の疲れで

私はこの生活に嫌気が差していた。

どこで間違ったのか…こんなはずではなかった…やはりあの時医師の彼と結婚すべきだった

のだ、

理由もないただの不安感から私は結婚すべき相手を間違ったのだ。

後悔する私はいつしか元婚約者の彼に毎日愚痴をメールに書いて送るようになっていた。

もちろん返信など来るはずが無い、でもいつか彼からのメールが返って来るような気がして…

そしてあの時の結婚をやり直せるような気がしてメールを送り続けていた。

こんな事をしてただの現実逃避だとわかりながらも毎日、

返ってこないメアドにメールを送り続けるそんな日々が続いていた。

街で元婚約者の彼との共通の友人とバッタリと再会した私は彼の現状をさり気なく聞いてみる事にした。

今の自分の落ちぶれた現状を知られたくは無かったが彼の近況が聞きたかった。

喫茶店で何気ない会話をしながらお互いの近況などを一通り話し

私はさりげなく友人に元婚約者の彼の事を聞いてみた。

すると女友達は少し驚いた顔してこうやってきた。

「知らないの？彼半年前に死んだわよ自殺だって」

「え？・・・し、死んだ？彼がどうして？」

「どうしてって・・・貴方のことを諦め切れなかったんじゃない？」

あなたが結婚してから変だったもの彼、それから少しして彼が自殺したって聞いたわ」

「ウソ・・・」

どうして？何で？そんな思いばかりが頭に浮かび彼の死を信じられなかった・・・

あの彼が自殺を？絶望感が私の中に広がるのを感じた。

「結構酷かったらしいよ、無断で2週間も病院休んでるから同僚が心配して部屋に尋ねて発見したみたい」

「なんでも自分で首をメスで掻っ切って死んだみたいなの」

「そんな・・・」

「でもすぐには死ねなかったのね・・・苦しくてもがいたのか部屋に辿り一面に血で付いた手形と這いずり回った跡が残ってたそうよ」

「まあ見つかった時は1週間以上経ってたみたいで部屋中すごい事になってたって聞いたわ」

彼の自殺の話聞いた後その友人とは店を出てすぐに別れた。

ショックでどうやって部屋まで帰ったのか覚えていない・・・それぐらいショックだった。

だがショックだったのは私達の結婚が彼を追い込んだ事ではない。

そんな事よりも心のどこかで彼に今の生活から救いだしてほしいと願っていた

その思いがもう叶わないその事実がショックだった。

その日わたしは夫との離婚を決断した、こんなアル中の夫の面倒をみて一生暮らすのなんて御免だった。

私はあの日結婚して幸せになるはずだった・・・こんなめにあう為に結婚したんじゃない！！

そして私を救ってくれる彼ももう居ない、だったら自分で逃げ出すほかに方法はないそう心に決めたのだ。

しかし夫に離婚を切り出しても相手にされなかった私は夫を泥酔させ離婚届にサインさせる事にした。

市役所で離婚届をもらい夫にいつもの調子で酒を勧めた。

案の定夫は酔いが回り意識も朦朧としてきたところでさりげなく書類にサインと判押させた。

後はコレに自分の名前を書いて市役所に提出するだけだ。

明日からはもうこの部屋とも夫ともサヨナラできる、そう思うと笑いが込上げてくるのを抑えられなかった。

次の日予定通り市役所に離婚届を提出に行った。

自分の名前の欄にその場でサインをして受付の男性に書類を手渡した。

これで今の生活から抜け出せる、私はまた新しい人生を歩みだすのだ…そう思っていると離婚届に目を通していた受付の男性が不審げな眼差しを向けてきた。

「なにか不備でもありましたか？」

そう聞くと受付の男性は頭をかきながら迷惑そうにこう返してきた。

「不備があるとか無いとかそれ以前の問題ですよ、嫌がらせなら他に行ってくださいませんか？」

私も暇じゃないので」

そう言ってぶっきらぼうに離婚届を私に返してきたのだ。

何が何だかわからないという顔している私に受付の男性はこう言った。

「もし旦那さんが嫌がらせで書いたとか子供さんにイタズラされたんだったら

もう一枚あげますから書き直してください」

事務的にそういう受付の男性から受け取った離婚届には赤色の色鉛筆で修正箇所におが着いていた

。

そこはさっき私が提出する前に書いた私の名前の欄だった。  
本来私の名前が書かれているはずの場所にはっきりと

「私は離婚しません。」  
と書き記されていた、そんなありえない・・・さっき確かに私は自分で名前を記入したはずなのに。

夫が離婚届に気づいて書いたなんて事ありえない、さっき自分でココにサインしたのだから  
「痛っ」

受け取った離婚届を修正しようとペンを握った時に左腕に激しい痛みが走った。

まるで針にでも刺されたかのような痛みで左腕を確認すると

左手の甲の薬指の付け根の部分に赤黒く痣ができていた。

何か物にでも当てただろうか・・・その痛みはどんどん増してくるよう感じられる。

その痛みはペンを握れないほどに増していきその場で離婚届の修正する事は諦めるほか無かった。

もう一枚受付で離婚届を受付でもらい、もう一度書き直して出せばいいその時はそう思った。

それから時間をつぶして部屋に帰り痛む左腕を擦りながらもう一度離婚届に名前を書こうとした。

だが何度書こうとしてもうまくいかない、ペンを持つだけで激痛が走り文字を書くどころではなかった。

そして痛みはいっこうに引かず増すばかり、腕に湿布を張りその日はもう休む事にした。

夜中に左手の痛みで目が覚めた、夫は相変わらず酒を煽って寝ているようだった。

湿布を張っているにもかかわらずズキズキと疼く左腕。

気になって湿布を剥がしてみると薬指の根元にあった痣は手首の位置にまで広がっていた。

手の甲全体が赤黒く変色し血管が浮かび上がっている・・・

「何これ・・・酷くなってるじゃない」

これ以上酷くなるようなら明日病院にでも診せに行ったほうがいいかもしれない。

何か変な病気じゃなければいいのだが・・・そう思った時だった。

さすってた左腕の痛みが急に和らいだのだ、

相変わらず赤黒い痣は残っているものの痛みはまったく感じられなくなった。

さっきまで貼っていた湿布が効いたのかしら？そう思いながら試しにペンを試してみる。

やはり痛くない、ノートに何度も自分の名前を書いてみたが先ほどまでの痛みが

まるで嘘のように引いてしまっていた。

「よかった、痣も明日の朝になれば消えてしまっているかもしれないわね」

今のうちに離婚届にサインをしてしまっておこうと鞆に伸ばしたはずの左手が思いも寄らない方向に向いた。

その腕の伸ばした先は先ほど名前を書いたノートだった、  
まるで左腕自身に意識があるかのようにペンを持つと一心不乱に文字をノートに書き始める…  
私は寝ぼけているのだろうか…さっきまで痛んでいた左手がよくなったかと思った次の瞬間  
今度は左腕が勝手に動き出して文字をノートに書いている…  
呆気にとられ勝手に動く左手を見つめていると何やらノートに文字を書き記しているのが見えた。

『別れさせない…絶対に』

意味がわからなかった、これは何だ…明らかに私の字ではなかった。

まるで感情のままに書きなぐったようなその文字からはまるで怨念のようなものさえ感じられた。

その文字を見て我に返った私は急に怖くなり腕を無理やりノートの上から退かそうとしてみるが上手く行かない、まるで重たい金属のよう塊り左腕は微動だにしない。

どうなってしまったのだ私の腕は、自分の意思で体の一部が動かない事と意味のわからない文字に

私の頭はおかしくなりそうだった。

するとまた左腕が勝手に動き出すとノートにまた文字を書き出した。

『そんな事しても無駄だよ、ボクはもう君の一部になったんだ』

「なんなのよ、この腕え!!」

『ボクだよ、わかるだろ?』

私の言葉に反応して文字がノートに書き足されていく。

私は必死になって腕をノートから離そうと試みるがやはり上手くいかない。

腕を掴んでも石膏にでも固められたかのように微動だにしない。

『無駄だよ、この腕はもう君の思うようには動かない』

『ボクはようやく君とひとつになれたんだ』

動かない左腕は私の妨害など気にする様子もなくペンでスラスラとノートに文字を書き書いていく。

「ボクって…あんた誰よ！何のために私の腕にこんな事を！！」

『忘れてしまったとは言わせないよ、ボクを追い詰めてこんな姿にしたのは君じゃないか』

「あんた、まさかあの…」

『思い出してくれた？そう1年前に君に無残に振られた男さ』

「でもあなたは自殺したって…」

『そうだ、イヤ正確にはあれは自殺じゃない』

「え？でも自殺って」

『君がボクを追い詰めたんだ、殺されたも同然だ』

「何をいってるの？あなたは自分で首を刺して死んだんでしょ？」

『君に振られ、君達があ教会で結婚式を挙げてからボクはどうなったと思う？』

「知らないわよ、そんなこと」

『ボクは周りの笑いものさ！婚約者に結婚直前に逃げられた無様な男だと陰口をたたかれ…』

一度そこでペンは止まると狂ったように物凄い勢いで文字を書き殴り始める。

『いや、そんなことはボクにとってはどうでも良かった…君さえボクの元に戻ってきてくれさえすれば…』

『でも君は戻っては来なかった、ボクは君を待ち続けることに疲れたんだ』

『そんな時ボクはある古い本でこの儀式の方法を見つけたんだ』

『この儀式は自分の命を絶つことで成就する、そして相手に制約を守らせる呪いの儀式だった』

『ボクはもう十分苦しんだ、次はその思いを君に伝える番だと思ったんだ』

『少しでもこの気の狂いそうな思いを分かった欲しかった』

『だから儀式を実行したんだ、まさかホントに上手くいくななんて思ってなかったけどさ』

『ボクは考えたんだ、君は間違った選択をした』

『君を幸せに出来るのはボクだけなのに、それなのにあんな男を君は選んだ』

『君は自分で不幸になる方を選んだ、だったらその選択を身をもって過ちだったと分からせてやる』

『だから君はその男と別れることは出来ないんだよ、それがボクが望んだ君への呪いだ！！』

『君はずっとその男に縛られ続けるんだ、一生このろくでもない男にこき使われて暮らすんだよ』

「嫌よ！私は幸せになりたいの！人生をもう一度やり直すのよ！！」

『それじゃボクの気が済まないんだよ、君達は誓ったんだろ？あの教会であの日に』

『病める時も、貧しき時も、死が二人を別つまで離れないってさ』

『だったら守ってもらうよ、その約束を・・・君は一生その男と添い遂げてもらう』

「勝手な事言わないで！私は幸せになるんだから邪魔しないで！！」

『なれると思うのか？自分だけ幸せになれると思っているのか？

ボクを死に追い込んで自分だけ幸せになれると思うのか！！』

「ヒッ」

その左手の書き記す文字はまさに怒りを殴りつけたように荒々しくなっていく。

『でも安心していいよ、君はひとりじゃない・・・ずーとボクが君のそばに居てあげる』

『ずーっと一緒に君を観てるから・・・苦しい時は励ましてあげる・・・

だってボクは君の一部になったんだから』

『だから安心して・・・苦しんで生きてくれよ、それだけがオレの願いなんだから』

頭の中で彼の笑い声が聞こえた気がした・・・その声は段々頭の奥で大きくなっていく。

私はこの先一生この左腕にジワジワと侵食されながら夫の暴力に耐えて生きていくのかと絶望した。

「うるさい！！うるさい！！消えろ、消えろ！！！」

こんな左腕なら要らない！！私は幸せになるんだ！開放されるんだ！！

そんな言葉ばかりが頭の中を廻った。

その時目の端に見えた果物ナイフを発作的に手に取ると思いっきり左手の甲に突き立てた。

「ぐうう・・・」

痛かった・・・激痛が走ったのださっきまで感覚すらなかった私の左腕に感覚が戻ってきていた。

果物ナイフは手のひらを貫通し机に突き刺さっていた。

もう左手は勝手に動く様子はない、これで呪いからも開放されたのだろうか・・・

恐る恐る私は自分の手のひらに刺さったナイフを引き抜く。  
ナイフを一気に抜くとそれまであまり出ていなかった血液が一度に流れ始めた。  
ノート一面に血が広がる、思った以上に出血が多いようだ。  
止血をしなければと救急箱を探そうかと左腕から目を離した瞬間それは起こった。  
腕がむず痒くなりふと目を左腕に戻した時、そこには血で書かれた文字が左腕にびっしりと書かれていた。

『ナイフで刺せば消えるとでも思ったか！？』

『ボクはもう君と永遠に一緒なんだそんなことしても無駄だよ』

『君が狂うのをここから見ているよ』

『君は一生幸せになどなれないんだよ！！』

そんな言葉が血で腕に書かれている、拭っても血は形を変えまた別な文字を形作っていく。  
消しても消してもその文字は消えなかった。

「もう嫌！なんで、なんで私ばかりこんな目にあわなきゃいけないのよ！！」  
もう私の頭の中はパニックになっていた、自分の腕が自分の意思とは無関係に動き  
更にはあの男が体に乗移っている・・・そして夫とも離婚できない、一生こき使われて生きていくだけ。

また頭の奥であの男が笑っている声が聞こえるような気がし意識が遠のきそうになる。

『ひとつだけ・・・ひとつだけあの男と別れられる方法がある』

「えっ？」

先ほどまでの狂ったような文字ではなく

どことなく優しいようなそんな感情を読みとれる文字でその言葉は表れた。

『ボクだって本気でこんな事を望んだわけじゃなかった、

ホントに呪いがかかるなんて思わなかったんだ』

『ボクだって君と幸せになりたかった・・・

そして死ぬ前にこの思いを君に知って欲しかった、ただそれだけだった』

「夫と別れられるの？自由になれるの？ほんとに？」

私の問いかけに血文字はゆっくりと返事の文章を紡いでいく。

『ああ、ホントだこの儀式には抜け穴があるんだ』

「どうすればあの夫と別れられるの？方法って何？」

『この呪いは君たちの結婚での制約を逆手にとっているんだ』

『君たちは教会で神に病めるときも健やかなる時も夫婦で居る事を誓った』

「それで？」

『要はその誓いの中にひとつだけ条件があるだろ？』

「条件？」

『死がふたりを別つまでって、条件がさ・・・後は・・・もうわかってるんだろ？』

考えなくても何をすればいいのかはすぐに理解できた。

「ええ、そんな簡単な事でよかったのね」

『ああ簡単な事だろ？』

「そうね・・・簡単なことね、フフフ」

すべてはあの結婚が間違っていたのだ、あれが私の人生を狂わせたのだ。

だったらその原因を絶てばいい、そしてもう一度やり直せば済むことだ・・・

こんな簡単な事で悩んで居たなんて馬鹿らしくなった。

そして笑いがこみ上げてくる、まるで難しい計算式が何かをきっかけに解け始めた、そんな気分だった。

その時酒を飲んで寝ていた夫が起きてきた。

「おい、何こんな夜中に騒いでんだ！うるさくて起きちまったじゃねーか馬鹿女がさっさと寝ろ」

「ごめんなさいあなた、すぐ寝るわ」

可笑しかった、夫の顔を見るだけで笑いが止まらない。

夫にそういうと私は満面の笑みを浮かべ右手で果物ナイフを力強く握り締めた。

型の古いテレビからニュースの放送が流れてきた。

ニュースのアナウンサーは事務的にさも興味もなさそうに原稿を読み上げていく。

「昨夜、アパートの一室より中年男性がナイフのような鋭利な刃物で刺殺されているのが発見されました」

「現場に争った形跡はないものの、体中に数十箇所もの刺し傷があることなどから同居していた妻が何らかの事情を知っているものとして行方を捜しています。」

「次のニュースです・・・」

それはいつも繰り返されるような日常的な風景の1コマだった。

そして彼女はまだ見つかっていない。